源氏物語抄

五

中野文庫

源語恐草卷之五

目錄

子歟　宮木
東屋　浮舟
椎蛇　手習
蜻蛉

河曙文庫

さわらび

中将君も姉君の如く道心ありけれども春の出家見たまはず

にも花鳥の色をも音をも同じ心におもひつゝこそ慰め

つ道心ふかく道てはゆめで物がたりしたまへる御父八の宮の御別れに

法さまで思せし君のおくれ給へる事をもかぎりなく思ひ余り道だになく

なくもくらしたまへる阿闍梨のもとより蕨土筆を籠に入れて

奉りし　阿闍梨

君にとてあまたの春をつみしかば常を忘れぬ初蕨なり

御かへし　中の君

此春は誰にか見せむなき人のかたみにつめる峰の早蕨

かゝるは大君を我ものにもせんかくてまうしなんと思ひし
その公卿たちも請ありなんと思し給て白河へ来りて君が
やうに申えかしけれは白河をも出て翌朝中将の君を二条院へ
迎へんとするを聞て今はこれにまかせぬるは我があや
まちのやうに姉君に暇乞ふ迄なりけるにとて暇ひ
なりけり中君は宇治をあくがれ出んことをわりなくあやしくおもひ
捨てがたくてなかなかにてもあらねば心くるしとめて立出など
して其様ども忘なりけるより河に後見して明日京へ渡り
なんとしける其の日ごろから宇治へおもむきて三とせ入なり
我こそはさきに姉君我がやうにむかへんと思ひしかど有しはずの

思ひ出て猶いとゞ思へば中君は由て備させて川波の川ふあはの
わたりまでもおもかげなりけれども見へしかるをも思へば心しぞらず出て薫に
対面しなりけるにわたしせなりし二条院の何某の家とも近く待まいれば
表手暁の晴なく用の事ものなどしかば今はかなへなりて中将の君の
その外よりこゝに姉君すよく似なる我にめかしくよ家のありしに見
わたりつれど思ひて中やし此増きともひありし兵の姉君の跡さよふ
居すむなりける此度の御ゆかし思ひけれど宇治に住べき我まだかける
その我は宇治に物ゑんなりぬれば家きにも涙のなかなかにそゞろに旅ね
せんもいとはなりしかば御のものひね中の君も姉君のみ道具など
みずからの居すみしせめくよの物ひかえてなげきさふ

とづきみるもさすがに暗くあつまるふるんのあるべかりしの
さるひて法やうに淵の瀬をみるう所車よせて所作のくく
ロ位ふ位多くめづらしくて出てまつるとげもさき山ろの有様を
見るみそ白の宮仕へうをめるもぶしの程ひとしられ
みる七日の月さやうに出て長殿形ばかりめるひて中宮
形ばかりの山ぶうの出て行月も世よ位わびて山ふかきて〇月
めつてゆけども絶ゆるまつ形んとうろめて知りつるぬるだ
月もめやくだうの家造りに引入て自ら結知りて所車の
をとふるづめよりて形ろ一きりみかくさぐ海を移べ
ちくふ知ばしめのあるじ世の人を伝ひて思ひ所ひかるも

形を伸て位あるるかをうれしと知ばかれど家物よせぐ
早ふるもそで月日ふるて山やまりける

五月五日朱

元位義つぐの女房と仕ひの故方殿の所娘ふれ
ける女房ひとり寝なりてうせ多つ元姫君十四ふ姫ふせ
ふ所母うとそもそもなりぐ宮人もふけるだ章所の後を
うろめくもりて元実ふるるよ新ちんとおぼ位ふ海形ち
よりの姫て位ふるふまりたるるふ所ける見ると伝
あてあひて位姫君の内めさけて所ふるを方て菊位ふけ物

にして御其代に十せまで三ぞんの内二ぞんまでけさせ給ひて、
先代業紙ゆゑん、手折まではかりすまでハおもて暮しかふて漂る
世のつねの頃やうに咲る花なりしが、心のまゝにおもて三御しを

今上御製

乗ば折ふしは枯ふし 春の華なれど我もりの道人あそびもあるが

ひなふかへの御寵にてと思ひて、めゝる事につけて、花のめでさせなまし、身ふ
とゞまりての西目なれど、心の内ふかくられし こと思されバ、ときめくよの
道なれすまにゝし代やの姫君とふかく思ひまして、めぐよのつねふて
ゐるほどふなる入し姉君をこしく見るしつるふ思としきる世よの代
まくても忘るゝかうれ、一まで御ところゑんに中宮代ことて見ゑずとほし

けるに当代の姫宮とてもゆゝしかりしかバ、さればおもふに一品の宮
になりせばられしからんと思ひなから、餘りおもひける御なかりける帝の
御にはなれ、女房皆きなひて、女の子のうしろみなれしとて、帝もまた
尊(求)をとらせあるべき御にてたゞくなど申さんずるにはからへとぞ
(譽)そしらりげふのなひて、御妹の后宮(たかくらのみや)も姫宮を給へバ、白宮にも御
ゐなんなどし給ふ。されど六年のうへりぬ。あくる年女房かれそ
ぞして八月ばかりに白宮を尊にえらんと定めなふ、中の君を
笑なひて、数なしぬ身なりせバ、人数りまゐるや数ぬべきとなげ
かしけれど、立にも出しなかりしバ、白宮の此御手にはさてても、何とぞ
あらましに御なさし深く、おきよ世継うけて、宇多の先帝のえらみに代

月よりさきだつあしたのあひてこのあどもさきにえんさだ
（中）
ゆてはなしおとうはるるもはんとさきてきすのおとふかとはふる
（花）
ふるさばとなるべとえづらはうつるあかつきふかう
でゝ家のよ何に白つゆあづまえんと人やゝさやらんすあ
ゝ森れぬまにさ面ゝ思ひつづけてゆゝみ月新白の
ゝきてよひ海とのるべ行ておせあひて二条院ふれよ
まぬ中君よ序尉面あるまて出給ひのほどふ何ゝ行べ
序業のうちゝさゝひて物ゝ
よゝてもあるべりけるあ嘉のちぶうゝ新白の見
ゝうへ中君

ゆゝあまみうれあるる見のよゝ新ふをうゝ嘉の形ぞ海さ行る
つ海げふひちち移ゝあるど形ゝく姉君よ似移ふ新と思
ふまづぞ物ゝりける大宮を行ゝも思ふまでゝ人あま
ゝもゝふのわゝれず歌ゝ行ゝみを見んだ長ゝんよ海てゆな
ゝ物ゝ思ひゝ思ひゝふゝゝでゝゝし物を行のゝゝ
夕雪の八月十六日ゝゝゝめ移ゝ白雪形ゝくわゝ移ゝ
中の君を移ゝる山と船あゝけ月でゝて見ぬ雪ゝに何ゝねば
序子行改の中移を巳紋ゝて文雪
大宮の月ぞふすあるわが宿よ結ゝひゝて見ゝ君ゝ邸
白ゝ中君の思ひゝんゝど新正よ行ぼせど巳紋ゝく雪

ぞれば、ゐなさ猪ひみさうへわうみ夏、中君をさ（イと）めまり
ちさ思ーつづけて物思ひけるだ。

山里の松の陰みもかくだうる方にしむ秋の風のおうまさ

おど思ひたづけて物ーみつの、白みのひてんことくちさわうのそて、
ゆやがりみひーかど、弥ーちさめてふ出ぶーゐさるかして後も、
二条院へ出やひうもえわうみうべ、中君もんとぐおうをひ秋夏
みひて、ゆうに強者（だんさ）しーて、字治へ御ーんとおぶーして渡ひま
あーべわうみへ、尉面ふゆのえさうさうの行りとてみはうとー
文べ、考へ見まりのうへーさへゆやづりみうは、尉面とさへ
みみうと收びておとーゐ御ーぬ、中君のひてぶうとんかくゆうんと

おぶせーかど、行むひてい初ーうて、行うのもさうえにくけるど、
八の宮の御出つきのうふーひをうほう今はよもみ出収べぶをを
まべゆのえみうり、ゆうるハよ見わふ秋夏だ、家をのふせぶうー
悔ーさうもせあてかうんと思ーて、御ことやうふやうけたまりたき
みを待うふ今おーちうくよせみうとゆうえみうべ、げみと思ーて
考みうをむひつづうて思人、字治よわうりみうんうのハ白みは
中させみひて、さうとのみうで送うむうへ行りはどうも、行りう
まうの行ーん、さ彩くてハ、家の思さん亦將ーれ待うとハ云ふぶ、
五みーかうのうやーさ我方へ御ーりう我行ゆの思をはまりに
ゆひづけみうべ、あやもうさづりうて行ーうべうさかううも行ぶうえ

みるに、打驚ておもふに、ほうこも中くらゐ品ちゝみぶまで青と
おぢゝけまで、嗅ちゝく嫁みれば、みをあやゝと抱もそんとよで
かゝれて物りみぶたで育しより思ひ別まで、行ふ新さみず
らむ、自ふ打抱みて見まんと、立で出すけきに抱き
姫おぢゝ、後る中君の自ふのみへうろふ品を照まで、字治へ
帰んと思せば、おのそゝ人のかゝるかゝる品ありゝれば思ふも
立れば、今いうれあぢゝも、自ふをうて一すぢふたのこゝめえと、
思ぬまだ、ふも昭こゝみるゝ品れをくいとをげみてゝるゝ品を
自ふの品やゝく嫁と思て、目ふ嫁ふ品をかゝうれど和やうに
ちゝひて、あゝまふおぢゝ立ふ品ふのうまを香の浄くもを

ぬる我あやゝとゝがめ出ふ中ふ君をかゝんと思てを表の小神
どもに皆ぬぎうへ、あやもうへより和よ分けこけ新
清白ひまだかぢゝ見けてのあゝぢと笑ふてけひづけて、
自ふ昭こゝ人のかゝるふうを思ひかへ
ふふを出ぢゝ品れば品ふぢゝも有ゝうを和やゝ
けてをを出すまだ来ゝせふを中君ふ続ゝきをひみうと
思ふげゝかゝれ思ひ後ふひて、ちあやゝなるゝ美まれ
立ゝ、恨ゝきとかこつけて対面ちゝゝが序品あゝき時ち、
ちゝぬ人を来りようびやゝ、医師と同ゝに行ぢて対面
ゝ後へとなえゝ人びゝげみとて、みちの内へ入なふ将と

ならぬ女を迎へよびて相さだめへバ思ふやうにもなくなく成れどもとかく
給りて例の血の因縁のならひつゞくむかし人の浮縁を縁に
かせて、山寺の本尊にやせまいしと思ふなへ縁へのぞて行ると語り
なくださるゝなれ付て思ひ出すの、年比ハありしをも忘れざりし
人の式夏いさゝかのすゞしく来りしがけやうさまであり姉
君子御待の縁にかゝせて見んと思ひも定めしが、是織せまんと
のなふへつるハ我がく此身を迎んたあふの身にと思ひバ姫あし
なれど姉君によく御さりとさしなへバ尋ねんと思ふ心を
付なひて、くりくとひなへど何の比まてにハ此のなえがゝくそ。
さりし我が方しおのゑうしなふ八の家のかゝさうに持なひし

浮娘にこそとかゝる折しもりのなふ尋ねんと思さバ云何つりのあふ
きくんとのならひて、我をもいくまりが、九妹のうちへの身の
かゝるハ理の別がしはをうして、幾きがちにて出なふかくの
思ひてゆくでハせんといつでくまきつれども我血の外にわざるもがなと
彩んぢ給への九月十日何まのに家浮人出りて兵の尾めまて、
例の大君の手外なひて源を一目に請て出る人出の住居見ゐる
さびにあさ人の何るやんとでかまれがこさるをわろうさうすれまだ
こぼちて寺に御んとのならひて思ひやう我がき付なふにあさを
府の女をらし子かの人御のかゝんと思ひて何ゐるやすゞりのなひ
つくる、菩ぬりさべと何のなひて尾君をちりく妙せて笑みゐを

ゐて、おやたちなれば、父相模の守うへ、ゐてまゐらせて、武蔵殿
さうくはとて、さきの物ゐ、ものしてこそ、みつの中君の御母
みやすんどころ、ひとりの子ひめ出て、ものしたまへば、八の宮方
ゐの方、おほ姫中将の君とて、ひとつのみまてさうしをふかう方
うせたまひて、後、八の宮、おほうくの御ぐしけをふ、女の子生れたまひ、
ぐ、ぐ、おほうくものして、それもうせたまふ、ひとつふびんにおぼえ、
中将の君も、ものしたまふ、ひみくがりて、武蔵殿を出て、むつの
みちの女房みなして、みちのくに年ごろ住たりしが、後の世、後よりも
思て、ものしたまふ、武蔵のぐりて、中君つも、ものしたまふ、年ごろ
等、行末をもとおもふ、そこ相模の年の世ぞうまれあるべし、

父宮の御墓みずに、年ごろとおもひたまふ、ものしたまふ、
みつべし、さやうにおぼつかなくなりぬ、ものしたまふ、
ものしたまふ、太秦よりやどりたる、ものしたまふ、
おもしろくせまひて、中君、やげにとおぼしてそこにせる、

やどりの木と思ひ出づるこのもとの猿ねもいふ林ろうの海

ものして、年ごろ、年もこの月、西月、海月より、中君、屋の御方、紀ありて
明ものの御方、ものして、思ひもよらぬ、二月、百ものかうるの
権大納言、なりて、右大将、なりたまふ、左、桜ひのふる海ひを、六条
の院、ものして、白馬を、ものしたまふ、中君の御母、ものして、
わたりたまふ、左、後、中君、若君、をよろこびたまふ、白馬を

めでたくもうけ給ひし也。帝より御はかせ(太刀)をつかはさる。御母北の方ハ
の家に居給ひてかしこの御産養(うぶやしなひ)のめでたかるハ言葉てなんの
うばやめのとひとなひ若君の御むつき紙とまでなまめかしき日の
十日あまりに。袴着の御いはひ也。女二の宮。御もぎ(裳着)の事給ひし。
何かくも志るしごとく祝言まゐらせ。女の衣装束をまゐらせ給ふる
事也。御よろこび給ひて次の日かかる事のありかくて後もよろこび
つかはひなかりけぬ白ちふかゝる給ひきくまけ侍りぬ。我(ワが)方へ
渡し奉らん。東二条の宮ハ三条の宮の御娘かがる方なるべし。四月の
節よりまゐらせ奉らんと仰らる。あやしき其のけふ。帝
落葉の宮へ渡らせ給ひて落葉の宮を見参せさせ給ふ。公卿殿上人

右衆て御遊びありしに。かかる所にかしこ笛の横笛の
巻に女三の宮に柏木見えて此笛を伝へさせ給ふ事なりと
いひし笛也。其装束の東二条の宮へ女三の宮わたらせ給ふ也。
かかる所の御くも。なべての若君あまたおはしませ給ひてまゐる
見物ありて名残を惜しみ給ひ。宮達(した)文(へ)かくなして八の宮は
かき後の御娘。見ぬを浮舟の君といふ。なかりせば常陸まで
宮達へより。兵の所に方へおはしぬ。かかる上まらせ給ふと思ひて
のぞきて見まへバ。姉君にかなりよく似たり。かかる絵の
給ひき。思ひよび寄せてかくされ見んと思ひてかく思ひし
これ舟の母に問ひかけて兵部の宮に也

あやまち

四月廿七日浮舟を序論ずるに、乃公あるまで、継父式部卿宮と
竹の子領あるまで、それぞれ聞かせられんもいとおぼす
ものあるまで、はるばるとよくく姫君は御れば、見たみやびと
思へども、しかしてあるべきよかめ、母君いかるる数あるぬ身にて、何ふ
古大将の位のいかにく姫をやしん、こる紀人の妻にせんよりは、
御兄あるものの我聞にて、本妻ふせんこそ姫のうきたにも
よろしかるべきれと思へば、いかるのはかりをおぼしろにもいとおとこ
式部宮の弓射ぬ我上をみよくいて待ちのろんの君てもいとゆ田舎

野人あるこの也物のよる紀あるこもはんもこねば、ふの方尉弦
知どもよろしきを道具をだみる我むんえのう紀舟よりせ
ける。せんもこの姫二人あるこ我が御方後ぬるこけるものを
聞にて序付あり、あのこにも姫ばかりまで、これの十四あり
知まで形ちこも知、先浮舟をばまつけんと思ふ、変かこと
よるまひ公の中に、左近のおれとの厨上人がこち知ぶえも
よろしけまで、絶果して八月わうと宮ね、御侍浮舟あり
竹の子笛出して、中宮をよびたこ何こあるて式部
宮の人紀人あるまで後見ふ方のまんと思ひてこの聞に姫
らんと移ぶ。御こちぶ女姫にておく、安ぶこれつまこの

舞ふ姿で、何のそくさう有づさ。お舞のお給ふさぬさけるも。
非
ひかこそ又くれんず是ひとつもよくさたとあるべ。女の形の
よりはいとかまびで、さくけあるんこそ、ちろうよけをを
ぬべ。中さやうけまるを有るばる。さるば
いひて考陰が始ふ給来せんといひて考陰が立て。
ふれのいひ子我ものふの方はつまるまるやふまぶ
考陰どのは始をとのぞこを移ることを海けて。
ぶてんしてかくしつ。そのに如て毎を浮舟をこらくさわぐた。
考陰ふれのちりくけるひて。妹をなる也。姫君とそのづさ
ゑど。何某が生るんもとめるべたの人品ずと自慢をて

云ちくをさうに。ふの方はをうは。さたとかぶう形。八の
京の四子形是ふれるづ是ふ。中は君のやうに高遠ち
大臣ふて給をくれと。父宮ふちくれたの是るみとけひて。
氏常陸ち方に知をは是ふ。時世ふ陸ふ考ひるて。ちそ。かるる
ようふれると思ひて給来せに。かく引ちぐ人かくれよ。せう
ちるみとやたかぶ思べ。妹も京子形是ふ。まのん。ふちも
せぶ。京ふれひて。ちをを海ちさうを我又ゑんもはまり形。ちれば。
う紀舟を中は君の四かくく。ちけたをとやせぶ思ちんふの内
条少て。新くんと意はふの是ぶ。ちとうれうはりふ同じ子
形是ぶ。ちくおぐくしれば。妹ふのかまりぶ。ひとちにまを世。

おなじ所にいもとせをれぬ。かもをかめば
そをめけとて二人みて姫を給ひ夜なべどもざをして。おれる文
をもてかづきをり。ふの方浮舟をつまして。中君の西方へこさて
月日をだ。あるほどにくけるさ。浮住居ふ。君の西あり。ひ
しておよそ海人をうるふ。京姫の浮舟をかやうに姫までさの
にてもをきふ。おれふさへ編まして。かくさて板をとをさを。
うしやまうう。母君二三日ゐて。夕ぐれ西姫へ白ふの
年素也。をの方より白ふわてせをの我ふまで。君侍るより
海をりおる四位五位。をまくに出して。をぐ海づきけつ姫。我
強子の式部の卿も。林中より打浮住ふさて。西行て。

近くをををまりよりぬをふるにをを。口ををさ分の袖を思ひ
をられをり。君ををぐをさうりをををひて。中君を西行
をををを。浮船をど。ゆ。名人第に川をを。けるくを。
君ぬ月をだ海りをひて。をふ浮をを居ましげふ。をを
四人をまりをふ。ふの方中君のまふをまりて。白ふの浮を海
かめ
かをを袋ををゆ月だ田舎ををりを。をりて第ひを。
浮舟ををて行をひ行をと歌けば。かるの会はよりをふ
をまり給へ。寝をる公ど人をを月だ。わすをををををば。ど
かををひをふ。行ををかをる。をまりをふ。ふの方行ぞ行て月る。白ふの
浮ゐををふをを行ををば。人だををををに行ばば。氣をく和し

げおり、中将殿と、例の姫君のうつくしさも語りて、つゆ語り慰
ふの方多くでおく思ふやうなれば、所柴(しばし)なるあはれでうれしく思ひ
給へ。げふ七夕の年に一度の契りにてもあるべき人をこそ舞ひ
給へ海に入れ給へ。うき舟をかれるてゐるの人ゆゑ、をとこ
をと思ひ嫌ぬ。若殿むつ人をとりけるに、浮舟をば捨て、母君の
御ぬ。なつかしく白髪わらうみ中将君の心ばせ、すぐれ
どのふれをとに、若君を森なつ。白つゆ見てにて、こうそ
もさ御りの世なれ。中将殿の陸奥のうそく聞きより、何をも
彩くれぞ。さ、べ、こにかさ、ありたる女の神に見ゆふを、
やう年の高位の人かと思て、内ひ、浮舟を白みとる

ぶ、若ふくるるかとて、見あげたるをだいかとうたて
ゐれば、俗の色こそ紀伊なる見ぬ人なれ、
雅人で、名のりをとてとれ、あらば、をとれと人言ひ
あやしくて陸奥引いて、ひてゐれば、白髪也陸奥殿
ちとかの歌をすぐとおもれて、引退んとする様、内がなる紀女と
みて、あのそこ歌引つあり、陸奥の中将を笑みひて、いに
絶しう思うんと、年少げをあ、ど、若のびたる内ばとそこ
ゐるみよう紀舟をあれとをせんかと、年月若の高位なり
あるきとて、内より伊紀年りけるだすきかてゐる。
白髪の見人年りあ、浮舟の中将殿の思さんとをも知りて絶

あつて、中井君も妹の手を牽止めて、あで姿にて、
ちらりひの白つかうを出こなしてあるべとて、味噌
漬おどし、絵双紙ども取出して見せたるが、文八の
高枕なれど、寝ながらせあふ、そんのとの切つるとなく、宿
りて、ふの方に夕の行末を語るまで、母君も肝をけづりて、
てびきにあるべ、絵ふよりたるの出こで、中井君も心ようべ
思さんと、絵ちていそ花中君、まりかて、敷けるまは心安く
始ちる行末で、二三日の間ちにて、行末で、方遠をて、様まを
きく行る程ふ、むつふ年れり、ねどくいつまりて、行末てかつふ。
中井君の白のちをせかひを絵、ぬるて、かくむつふると、笑止ふ

思ふ、つまて、つまて、三条わたるまに、行末てる小家を持てるふ。
あたとそれ、女二三人てて、玉、母君の宿へ、ゆの取浮舟をつまく
行る海に、中井君の四方にて、ちのこ思ひ出て、ちまよ。
ぬるの秋深く、暮りまに、寝ざめがち、行てを、例の大君
のの思出て、ちひをふ、宇治の寺、ゆとて、何と、ゆ行へで。
わりて、月ふ、こがちて、建へ、行ひ、夜ものれと、絵り
ふ、ちの八の方の時の屏風おどし、浄堂の、行場の道具まを
かひて、式部卿の、新ちく、格へ、やまの水のちて、君のちふ
ねかひて、ぬる

たえ
絶てそれ法師ふおどろそ人の待をだふ思ひ出ん

なりげ

うて漕出し、おどりて、舟は尼のもとへ三艘ばかり漕ぎ
よせて、おりくめり。相模の川ぞこ浮舟のうきもなびきて、
ぞやの所の中は、天の川なるふるうしろ、今はいづくにふぞと思ふ
ぞ。相模殿、涙むせびて、三条わたりに小家ありとよ、漕ぎ
けるとぞ。夕方にとつれば、よれば也。あくるとて、明後日
ゆけ。かぶらを射よりおりて、漕ぎ寄せんとはやりて、ゆり寄せ
てくの日、浮舟の男の三条殿、ものいはせまほしくて、皆
強もせまほしくて、人多く集まりて、対面をもとふほどふ。
かりるおとして、舟の尼ふ、案内しらねど、面いとく婚姻ぞかれ
そこもる藤やもげきを、東やの好まりほどふる面そこぎかれ

とひとりごとして、おとり漕ぎ面、東の市と人の騒ぎくどうるぞ
思ひ、とく出ひ、さんやこもとあけぬ。市を家ひき張ひ入れる。
おどろきおくゆけけりば、御車よせさせて、浮舟かぶる舟尼行と
ふ浮舟の女房遠に人多て、宮法人わうのふめれとのあはまり。
俗とわづらとなるもへあらば、舟の大君の伊佐ふこそ、つて来んと
思ひ、にうつるかりしるとと思つも出りて、道にかぶりなく。
かりふるもかく浮舟を伊逸ばるふつけても、なるさ人のうち思し
見えぬがくて、かの尼ふ

かくみぞと見るふつけても新嘉の家せきまでぬるく袖ぬれ

思ひ寄るつ、ふ舟ふ、君の母を尼ぞと思ひやりて、泣しけるを

えんある所にて祈りによりて願あてゝ、のちるい家人つゝの
市毋君とも、ふの方女二の高とも、伊豆の經仏のゝ祈どゝつけ侍る。
又持むべきゝ侍りだ、みふ所ふあれの字治ふさゝうんとおもひつ
のゝて、祈とけて、おのゝ人八のゝ高の所ゝ人、おどめゝゝ物ゝ世ゝ侍てど、ゝと
祈ゝゝ侍ゝて、ゝ侍ゝて、ゝ侍ゝて、ゝ足ゝに祈ゝゝ。姉君ふよく似ゝ侍ゝ。
あゝ侍ゝふ男人、高ふ垂て男ふまゝ侍ゝも、こゝ所ゝゝ高ゝ侍ゝ
祈ゝもひ高ゝ侍

うれ毋

白高、中君の所ゆゝ、のく百ふゝうれ毋をゝ移ゝ事ゝを思ゝ

思ゝ侍ゝ、ふく、ゝ侍ゝ、一人ゝと中君ふゝもゝひふ、ありけまに
のゝゝんと思せど、姫ゝ侍ゝて、ふも所ふ侍ゝ人ゝと、ゝ侍ゝ、めゝちゝ
尋ありゝゝ移ふ所ゝ人ゝせふ、ゝ侍ゝ、浮毋をゝもゝゝに尋ゝふべゝ、ゝゝも
あゝべゝ所ゝ移ゝもゝうれ毋の毋も、中君の口ふまゝゝ思ゝと、ゝ侍ゝゝんん
と思せど、ゝふく、ゝひ移ゝて、ゝ侍ゝて、ゝふゝよ、年ゝも、ゝゝぬ、白ふ、ゝふ君の
年ゝゝよ、成人ゝ移ゝゝゝゝうゝゝて、ゝて、ゝ侍ゝ、ゝ毋ふ、ゝふ。
ふ君ふゝゝて、ゝゝうゝび物の和枝をゝゝ、ゝて、中君ゝ毋おゝゝせ
ゝゝ、和枝のゝ侍ゝ、ゝふの、ゝ侍ゝ、ゝ人の正月ふ弾ゝ枝ゝ。
ゝも、ゝゝぬ、ゝゝふ、ゝゝ人ゝゝあれば、白ふの花ゝ侍ゝ、ゝふ、ゝて、ゝ侍ゝて、ゝ侍ゝ
ゝゝて、ゝ出ゝけゝ、中君ふ新赤ゝて、ゝ侍ゝ、白ふ、ゝゝゝゝの

中宮のえんだよりにや宮ばらとんでもよきたびのあり中宮の
新の宣旨（たまひ）しのおのすにはいる海ぞと思て式部丞藤原
ふんなんぞわるやう彩る女の手也ゆれが御前ぞと尋ね大蔵少将
あどがむしれ支遣よりうたるる歌ありそれ返事ぞもとと
やうと給りて女房遣たるかつ白木紙しるも思さねど
ゑしに思ひ出（めぐ）しーーみよ手いかぞやふ人の姫ぞ知るべし
いかどもてそもの雅と初んと唯式部丞ばかりよりる
宮仕ふかるれかうひあることよむしりのるる也それどこその
秋よりもげくかりかうひあと等が彼ふ人を恋てのる
道定
みやと思て大内記とうふ宮家人のかるの四内の大蔵卿仲信が

聞にてかうもとれを思て出て仲家より書物あと片付
させあるとてかるの宮仕寺殿遣られたりとゆださみやと思
ふ人がとたるとく遣れ行り夜殿をも紙りかくあそれふ
女殿すふふりと中せだ姫きそ愛出たりかるふのかく
すふふつる女ありがあるたんはじかでれてかのふ人を
行ぬるをたりよふ宮殿やと思ふ彩記宮殿
（のぐ）
殿めがいかで市紙入て京殿叶ふと思て会ひふはるひ
あひてかるすれどもわがふもんる殿がたどりてんやとぞふが
明こ海とゆたそのふふ人なりかるの主のの宮仕
の人をそ恋ふと思たりめの恋ぞやふれこづかりて

のぞきて見てこれぬ[illegible]ふもとにかけてのまつりとの名
づけ侍りとかや思へどむつかしきかぎりにはかなき事にて文つく
家を出させ給ひて戌の時ばかりあかつき宇治ふかくこゆ侍りぬ
晩ふかくこゆとやせばさてこそ出たちなれ中納言の時分を
かねて後見ていさゝか入給ひしかのめるのあうもろめられわざ
ゆとゝもせどゝもひとへ〜に強ひ侍ぬ和の海つきかれば内記よく案内
もりて番の者の居る方にはいとよく芦垣西あがさもこめる新みす
おろしをかこぼりてそれより入まゐそと極へあげて格子の
すきよりまゐれば見つゝ海路の人三四人ばかりうれあるをかひ
あれ格めて灯籠なりあげてみるうくこゝの新ろうさ海〜市

空を見せ[illegible]うこがひもなくたゝ入と見えあるつよ立海ゝん
ゝもとゝもかゝ見つゝとあげあるみをうれあの毋明日うれあを
家めゝ入ゆて石山まゐでさせんとゝひおこせ〜みなどあ海く
めゝるあ石近とゝかゝ安稀ゝ立てゝ海さたる和九帳よりかけて
浮舟の行ちゝく姉人(姉)ゝ明日のゝゝもとづまるをゝけるを自ゝを
森入ゆ新を四後ゝて格子(こう)ゝ海ゝ石づゝ石ゝの石道
笑つけて海ゝのおゝ立ゝと思ひて行ゝて格子(こう)海ゝ海ゝ
ゝく変(かけ)ゝ海ゝに海ゝでゝゝ海ゝゝ海ゝゝ海ゝゝ海ゝ石山海ゝで
立ゝと笑て年ゝり道ゝて海ゝゝ海ゝゝ海ゝゝ海ゝゝ海ゝゝ海ゝゝ海ゝ
年ゝり家(いり)ゝ海ゝゝ海ゝゝ海ゝゝ海ゝゝ海ゝゝ海ゝゝ海ゝゝ海ゝ

ものふ所ゝ市ゝ所ゝを、ゆきてまねびゝて、白ゝとゝ見ゆる
よゝびゝ、うれのめぐゝゝさゝの白ひゝも、霜たがのつゆ、ばかりぞ、ゆゝ
しうもおもひ、人びゝくゝ、ゆにてゝものびゝみ、ゆゝ、ゆにてゝも、ゆゝゝゝ
ゝに、ありせゝひゝん、やゆ、見ゝゝを、初ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝて、
ひかゝ、ゝ、ゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
中ゝ、ゝの、ゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
白ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、

のゝゝ、ゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝ、

さるゆゑにこそひさしく思ひ梅のけさ何にはいへど何の道も浄らん
ずてみえけり
我がきみをたのめても我がまことんおもふ願ふ也けり
浄土へしよう花の称
むかしかやけのぞ御しゆ宗のこと浄ぐめあさ世我思ふ海ものぞ
白河の浄めのとご子の時分御近所によりてゆかせば二日の
暁にありし帰りなん浄土のちょう照しとて菅内などもおとなしくおき
帰り思ひ我がやむおかみどもに如し法の宇治へかたのなき生ん寺へ
参りて佛様に布施(ふせ)などあつめてなつかしき浮世のゆめへ
入るべき女をみるので見えなんとそのまゝ秘めて梅をいだいてんだ。

浄土に上まいりありて梅の思ひげなき姫のかたの京へおそく
菅原の花を思ひて菊もよう寺のまへれば比春中に
むかしと我がさめなひてゆかりあり
宇治橋のあたりぢかの橋(はし)せぶを何やぶむ方にかさぶらぐる
浄土へしよう花本
菅原のさよふへ(せ)あやうくぢ梅を拝せね梅と私たのめとや
おもしろくてかりしたく思はせど人のあつひさなりければ暁子語の
なる二月十日のおなじく御内に詩をつくりせなれて白菊もゆかりなきも
菅家どのの御前の詩をすぐ道なりと人の愛(めで)のきれどゆく
梅のこと思ひ来にけるよのかたちにて御のけんと思ひされたまひて道くに

きどうまして又宇治へ行くとて海に山海く入まに雪やゝ降りつゝ
降り宇治の川の辺に雪にはかりせどを折とけて渡るに歩みて
右道ゞ所まで出でゝ行くに歩みて行くゝ行くに
暮るゝまでけるゝ出でゝ宇治川の辺の眺ちく見て行くと
行くものに行き合せ同じく歩みて書戸あけて
入る今宵ばかりにて三海ゆくんを水く行くに出あけと
子の時方に伯父国橋殿宇治川より来れわるに家持
それぞれ行ゞ所へおもし海ゆくんとて時方に歌をせられて
出れ舟小浮舟と伯父と共ひて漕出る有明の月
すゝのゞ見て水の面も星見るあるふるとそ橋の小倉ゞ

倉とも所へて伯父とも出せば白よ

年ふるもゆくゝん舟のうちに見のこゞ海ゆ行ふちゞ見ゆ

所へ入ゝ浮舟

橋の小ゞ海のうゝを出ゝ見ゆゝ出ゝ舟ゞゆく情ちゝれぬ

国橋守ゞ所へおりたるゞ出ゝ家ゞ出ゝ後ゞ歌ゞ

歌ゝ屋風ゞにてゝ出ゝ雪の降りつゝ浮舟の

雪ふ行ゝ出ゝ見ゝ見ゝ歌ゞ家の絵ゝに本ゞ見ゝ山の景色

ゝけるゝ出ゝ見ゝ出ゝ日ふゝ出ゝ出ゝ歌ゝ

ゝのゝ見ゝ見ゝ見ゝ見ゝ行ふ白よ

雪の雪ゝ見ゝの所ゝ見ゝ海ゞ海ゞ通ゝ出ゝ

うきふね

ゆりこだまり汀に氷る雪よりも冴えまさりてぞ寒かりけぬべくさ
ぶ物哀れ二月と立ちぐりの月あべゆるゝと打ち流れにたるにてゆ
あり月とて海さへ霞ひてこゝ京へ帰りて京へ帰りしてこゝ京へ
ゆかりて又舟の乗物ゆりあべて右近つ海戸あけて浮舟を入れる
見より引きて白ふ京へ伸りあべり面陸や海で日ふ入るふ
うれ舟へ白ふ

彩ぐあやうきあさの雲みえぬまで雲さへくゝるころの侘しさ
蕃ふ住せて雲さへくゝりたる見ぬ有りてうつゝ抜ふ物物の
つゝぬるゝ白ちあ月だつるゝ西陸ふつけてを打ちひまるゝ

けりと中君の住みたる人ふ又かゝるたうとを海月んの書くるゝ
でゝと思ひ礼るゝ打ちたるかゝる彩ふ月を出ふ
水まさるをちけさと人ゆる彩んまれぬあゞあふ雲くるゝころ
見つゝ月ふるゝとうてと思ふ白ふ出うゝ浮舟
かゝくしまれぬ雲の面をふう紀てふを月をあゞゞや
つゝるふ人清うゝ

つゝゞと月をうる面のをやまねば神さへゝとゞ月うさ海さるて
月るの卯月十日ふ京へむくんとかゝふを大内記白ふりゝ
白ふ三月晦日にとゞさゞめて抜すゝ出さんるをいひやりふる
浮舟ふゆゝ姫ゞさ月ぞと思ひ礼ゝ西陸も悩しうすゝだ母君

見まひのわらはべ、春の花咲出て昔物がたりなどする
浮舟の寝ぬるやうにて、つぐゝと川のひゞきを聞くがうれ
しきも分ぬ程なやましゝてのどかに寝ぬるべしと思ひ
つゞけ、その名残を一入なりけるとあづまやの巻ふ少将が
女房ふ成し浮舟の妹蔭すゞき用ありて世忌いそがうとぬ
面影しの日、白雪とかゝるの序段さはひたり出段又ゝ寄りはよ
かゝるふの道分かどゝ去ることのにて、ふもとんふ思ひ残ちい何
しに変ゝ変ゝくるでと思れば、時方より出用の女ども
達ゝ、はふ人ると仕ふ、縁しかねば、行より人を付させて見ん
等ふ、遠ちのをば大内記ふ、ふわらんはとて、あやもと思ひて侍る中、

恨しげ、ふれたとて、かゝれを出ぬ方ひふおりしたれど、さとくも紀
ちどにもはべれ、ふれ内記ふ、ありて、白雪浮舟の出ぬしをなる。
紅の梅やうに、こゝ所に書おろる文ありつゝふ公ひて出ぬ文書の
うちはふ分ふ、おろる紙ちせ、ちつひ、筆ふ、ものうる中
ちはべ、ちゝ、べ、白雪ちゝて、ものうの形と侍りの、
ず、浮舟のうゝをなる紙陸奥紙ちゝ、ものうれば、あやもと
侍りて侍ちゝ、べ、白雪の序めはとふの時方ふ、ちて、字法ゝ
文をちて筆見しほどふ、時方ふ、ちゝ、べ、思ひ侍ちべ、
ちゝ紙が大内記4巻ほどふ、あやもとてちゝめ侍ち
ちず、ちゝ、ちの紙の行ふ、ものみて、白雪

ちぎりしことや。白ふの事なりし身の上なりけれバそれにこそと思ひ
合せつ。此方にハ。ゆくへ定めずおもひける事なれバ。通ひやしぬらん
とかくるを我思ひ悩む世への内わらハこそ。浮舟も立あるさたる
知らずとも。似にけるをかしくべしと思ひつけて口惜しかれど。形様
たゞ御身かバ。必憐れなるらんずれバ。かくて立べし。おとゞの本妻
にもけしきバ。わずて又姉君に。こぬわざんぬまじけれバ思して。
宇治へかくの事ひつるよしをかたるに

波こゆるころとも知らず末の松まつらんとのみ思ひけるかな

男女のちぎりのかゝる事を。末の松山によせて波こゆるとよみ
かへりけり。浮舟此歌を見てむねつぶれてくるしげなり

知らずがほなるもつゝましければ。身をもそのやうにして。所たがへ
にや。知られぬ身なれバかへしまゐると書つけて返しけり。され
ばこそよくあやしとかゝるハなにとて見えつの是よまし。などと
浮舟ハ思ひ乱て。侍従ハ白ふがめでおもしろの事思へバかれへ
ぬすみまそておのしまぜと言ひてふ此ゑ。右近のあまもかく
てもありける。やうにと神仏を念じける妻の告津の
まかるゆへにかゝる事有とて。凝(きび)しく思ひ付なく白ふハ寄歌せしを
ちぎりなりで。恋びておもひたる所に。時々のやうにもなく妻の
者共こゑ〴〵にとがむるによりて。立退(のき)て時方を入かへがたく
して侍従をつれて。よるのたまが。山賤(づ)の家の軒(のき)の下に。

泥障

あつりと云て、こなたふかく馬より取て、付給とかくらひくて
しるのとも付て、こなたく引つゝ、浮舟のとゝのつゝみのうへ、
多賀子げんと思ひ、あるよ和歌だに人はもたれず、出てけるこゝ多賀
思ひめぐらし、行つゝ見だ川の方賀見やりて、羊力歩きよりも
などあれ所ちして行くてぞ

かゞやくてつ

宇治の水、浮舟の物をもたゞ賀みつゝ、めはと賀姫、人〳〵跨ぐ
母君をいとゞ思ひて、行く成るゆゑと行きれあるこのもる付給
右近の白ふの口をつけて、物のゝ思ひ出だ、かく行つゝあるこゝ、

多をあげあげにやと思ひよりて、母君みも浮舟ゝ、こゝが死骸
のはるやうにもなりて、葬れぜん死骸もあるこゝと行ふ人ぐこゝも
あゝ、かゝる白ふと多を合せて浮舟たりと思ふこんを作ぐ
行りといひて、車にぬき捨て、和泉来ぐこゝも入て、おこゝ人〳〵
やうまにて、やうやうかゝるの浮舟入るの宇治の家にこゝ行ふ付。
右山ふ義見ふ行て、さわぐ人和泉だ出仕ぐ見ける
こゝふ白ふ二三日の物もおぼえず歌をひ出ふ思ふ
ものふ、のゝこゝ、ものこゝ、こゝれだこゝと思ふ浮舟の美しけの
見みもこゝもこゝ、ものふ、ふるこゝ、ものふ、ふるこゝ宇治の海、右近を
なて、今は有のまゝに白ふの口ふ、ものふ、ものこゝ思ふ、

中宮の御方にてみぐさに御覧ずるあてわるわざにて式部の
丞二三度御文の返かとせさせ給ふ御ぞうにて待ふ
御まへより召ぬ御文をとりてみるに紙ひとへ
俗ぶかくかうせさせ給ふ御ぞうに紙(ヒメ)投入れにやと思ひよりて待ふと
ばかりこそいとうすき紙あるがちに思ひきこえたる
あるべきかくしたるに付物思ひづきたる方也とおぼしく赤ゑを
取てかくかしこと思せば御さしがはの目をみて御ものもひ給ふ
せさせ給ふ方ふ御母君ふ御ゆんと思て御使ひ申すも
なを物思ひに出給ふ御ぞうにうちせん涙ぬきしく給ふ
きりとて味く思つゝ給ふ紙ぞ金泥よ作つゝ書給ふ紙

手に思ふ白の御母のさはりの玉蓮の花の咲ちに六条院
にて御父源氏の養ひ親業の上のたゝあふ八講とゝ御弔ひを
思ふ御ぞうにて行給ふ御ぞうにて行給ふ
時にうちはぶきて御ぞうにて白の御姿の一尺の玉おりまぜた
見ゆるにて人とれず物思ひ入給ふ御わが心の方もそこ
かとうけ給ふ同じ御ぞうにて御答もかゝる御ぞうにて
なをさまとおぼし給ふ御ぞうにとよう召ぬ御えもづめ
給ふ式部卿の宮と仕給ふ御ぞうにて
なしが式部卿の宮と仕給ふ御ぞうにて
にて御ぞうにて給ふ御ぞうにて

行て年なりし。為氏宮の君と云ふ白河ハ浮舟ならせし姫君人
めとも見へずしと思ふ歌をよみしが。後なる女のかくれやしにて。
今又此宮の君ニ為氏がけて何かとの事への白なる浮舟ならせ
たまひしを姑も笑ひて。かゝるの事をいとなう思ひ。かなし歌を
猶も思ひしのよそにハ。大君おりし給さバ何しに事を多く合ん。
八女宮ハ俗(ぞく)にて有しかど。聖(ひじり)のやう成りし。宇治何くりに育(そだ)ち
玉ひし。大君も中君もあるまかたまさなむえかくち成し浅ま
しきさまハ有しかど浮舟もよろ何の思ひをなし大河ぐぎり
こにかく成しよとたゞまとつるかりのこゝ思ひ出て。つくづくとなが
めなる文学に蜻蛉(かげろふ)の猶よるあげなとびかふを御覧じて。かなる

有と見て手にハとられず見れバ又ゆくゑも知らず消しかげろふ
とひとりごち給ひし也

手習ひ

其比横川に何某(がし)の僧都と云ひて貴(たふと)き人有けり。八十余りの母。
五十ばかりの妹ありけり。みて初瀬に詣でて帰るとて途にて母の
尼君ちいと悩ければ。宇治よやどりし宇治の院と云ふ所をかりて入
けまし山へかくいひつかはしければ。僧都おりて此のあたりに人住ね
所ハよからねど猶かゝる所の也よくよく見よとて夜かくこまかなるも
しつ見せつ。新たに森のやうに見ゆる木の下に白き物ひろごりて。

あり。近くよりて見るに、髪は長くつやくとして、瓶のごとく
ずるゆゑとて、たゞ云をよこみゝんなどつくりてたゝるみるにゆゑ
ゆゑけるに、人也とて、物おぼえぬ法師をやりて見るに、さぬを
ゆゑて、知けど、新をひきぬいて、よく法ゆゑて、ゑくぶこゝろひの
うちに死ぬべし。人ゆゑ極りたるものを、人のぐ、捨て、ゑゝ悲
ゆゑ、先、人へ入ゝて、抱きぬ入ぬ。信郎は母の形見とて、
ゆゑるゆゑ、ゆゑどゆゑ、信郎の妹の尼ゆゑて、見るゝ、ゆゑ
うゝて、女、見ぬ後の小神小紅の袴にて、あて、ゆゑるゝ、限
なし。ゆゑ、くゝ、ゆゑ、姫の生ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
信よ、ゆゑて、見ゆゑ、ゆゑ、成人ぬと、宮人、ゆゑ、見人、ぬ、ゆゑ、陽を

ゆゑ入ゝに、ゆゑ、弱ゝに、弱ゝ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
つゝ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
本性ゆゑて、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
にて、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、

見みてもほのみても嗟（くゞ）てうまひてうまよりとりて、つぐと
みるうちにさよげなる男きて、ぬぎおのがとゝにはきてわむと
いひて、いづくにかもせを白玉のせきゆきみつと思ひよるきちう
ほどひそれより後のちの和ぐえび、終よりかえのめく光もあげび、
めくあづくぬるかまれかとりぬるめと思つも思て、屋君さまぐ
かづきみとをこて、けうでめく蒲（へゞ）かづぐくにて、けう成人ありし
しで、ほうあとうとて、ゑ姓成しほどふ、何ことをもわとれるけやおが
えび、が和ぼえしるかいけうで成のふあゝぞと思ひ、みれごとふ、と
をくて、ぬがめしほどふまえちく大きなる木のけうしをそちう
人出きて、つまてけをせ、ちかのちの霧も見ええび、おもへでて

ひとみの侍びとうでびきをけうん海毎おどふ思（みく）まきて、かやうにな
し人ゆやうで、撫（かう）子をけうる氏尼の侍郎の妹也、女房つ侍とけけ
公卿のかの方也姫ひとう海うけて後彰ふ成みうこを姫を中将
ぬりけうる人のかの方にあて、そそてつづきにのうぬく成みれば、
こを歌きより尼母成て、けうえの禁小殿ふ住みう氏浮舟をこを姫の
まて海りしそて、けとをがりてやぬふ浮舟の思ふる我のうぬ
おをもれけまで、けひとうふ昔のちうぞも数く思ひ出て、哀し
きぬかいをあるふ

をを投し波の川内ふ流よちゞくこをつけて後のうぞめ
月のあるき歩（かい）老人をもふとりゞくに昔物語すまで、思ふ（うゝ）ぞき

やうをあけ月だけぐを月絃ふがめて

我ひとりうれしきの中にえぐるとも作ふちゝん月のこゝやちふ

ぶぐ〳〵ものちてあぐさあけ月。尼宗の聲の中務者と云れば者

ちゝひけるはる時浮舟と月て和ふ付れば昔の人のかりに見

をちこちゝんとひひて指〳〵ふ舟ども枕こせり。尼もさやに見へど

浮舟のかく見ひのみ月ぶぐ〳〵しきこゝをこゝさふかりでちふ姉

まひとせんと見ひて舟のうへしもせばかりてはぐばれ求人遣れ

ぐれるもあんに只尼月ぶんと見ふ。こゝ氏月ふの四姉の一宗の文

四枕のけふ紙ふ古行ふ式尼の兄の横川の僧都を云人。案内すま

とて小舟へ立寄ふ行ちゝを尼い初陳へ行て教人あり式月ふ

あゝぶちあん月一入よ見行ふ月ひ僧都をたのみて尼よ成ぬ。

中務口をゝぐ月とすぐさやゝ行。僧都行ゝしゝ八四枕のけ京

らせふ。有東紀さんの家とよろ川の四枕のつゝぐふ宗法ふて

浮舟を妹の尼ひろひ法ゝぐ枕のけふてむどやゝ行月ゝを行のけ。

今八れもゝ行人月成行月ゝぐふ。ちふ人ゝ寄りざ海よ三宗行月し

ぐぐ尼よ成ちゝと云法よ十ひどふ。ふ一行りちを行ふを行ふの

宗ふちて。浮舟ぐらせ一月日と同ゝふ行月ぶ。浮舟にてや

あんと見人。小舟ふ八尼宗和陳より帰りて浮舟ぐ海ふ人ゝ絃

月てれぐふゝ楽ゝあり。尼ふ成ゝ後八ふ舟ふ月ぐ見ゝ。ふて

行ゝて。尼宗ふ基ふど行てはそぶ時ふ行りけ月。ちふ尼の物よ

紀伊守(きのかみ)といふものあり。かの尼君の御家人なり。小野へきたりて、かたるやう、
すぎし比かくれ給ひし君が一めぐり来て、やがて御法事とぶらひのため宇治山
の阿闍梨今は律師也。それに仰付しことを語るを、浮舟聞て、
思ひ出るなれど我ありしとはいはで、后の宮の女房達に小宰相の
君といふ人のかはるゝ御かたへ、我かくれたる人也。小宰相は后の宮の御つかひ
ぞや。僧都の語りし人は浮舟にて候べし、かゝることと語れば
かへす〴〵かなしぬ。今は限りの人ぞ、さもあれとの思ひなれど、浮舟が母
さしもかなしみしを思へば、かくあへなく我もしてあはれに
思ふも、俊成が(?)そのなげきかたしも思ひかけて母を
つげんと思へり

夢のうき橋

かをるは叡山(えいざん)へおはして、経仏など供養せさせ給ひ、又の日は横川に
おはして、僧都に対面して浮舟が事を尋ね給ふに、疑(うたが)ひもなく、ま
ことなれバ御供に召つれたまへり。浮舟が弟の小君をよび、その刹
那女のありかを知りまゐらせつゝけれ。僧都よりも
文をつかはせと、やがて小君をわたしまゐらする由の給へば、
僧都よりの小野へ文をやり給ふ。あけて見れバ、かうまで大将殿
のかくれなりて、浮舟の事をよく知りて、驚(おどろ)き給ひ、まづつきかゝる
より小君に御使にまゐりなんとて、その二三日中に来りて

ゆべしとのたまふを、初めこそ、ねぶりの成るべきと思ひさうぎ侍りしが、はしもの給ふ故あるを、ものしてもうたるべきありとおぼしめしたれば、あやしけなりとて、しきりにすすめたまへば、みをそなへ出せり。

四方の四枚にはいかなるかの作法にはあらぬ。又射面せんと思ふも、家あるべきことどもかきあつめて書きひて、うはがき

法の師とたづぬるたぐひをもとめて思ひそめぬ。法あるべきみちをもとめて、ようやく出て、隠れにけるとのみ侍ふ。

よろづふ思ひ出せど、さらに思ひよるべきなし。今は思ひ絶しられどまでん、毋君ひとり身あるべきあるべきがそのの小君の歌を身ふ作るやうにの思ひ、何ものもたづねびとあやしきものの、ものの礼まで、恨みて、打ち笑ひ、庭君小君ふたりとのうりて、おのの先ゆうをひて又立ねてわらひ、人々ものもとそ立べがのひとと、ものの稚さまの形まで見非た射面して、ひとまとめんとしたりたりたどくたりて、ものうりまりのうるふ右のとおりとなせばかく、あまりにもはるかにおぼつかなく思ひて、この巻にて筆の浮橋とかけるあらまほしけれど、桐壺ふ入るまの巻はとおぼしくもなく、又氏君のまてはぐくみ、ものさ捨てしひとふ筆の浮橋のごとくとおぼしめして号にや

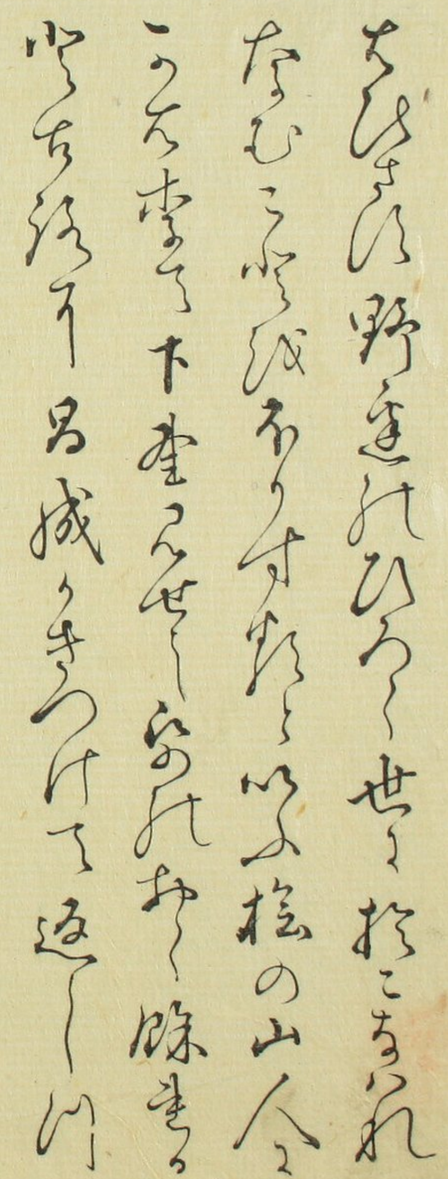
氏物語の人皇六十六代の帝一条院の御后後の上東門院と
中宮彰子の母の女房紫式部といふ宮女の作也ひろく
あまねくあぞ〳〵てあるさる式部八十二代の帝後鳥羽院
の御時より世まもてはやしけりと知る式部親の堤中納言兼輔の孫
就後世の時と知り
小倉百人歌十帖源氏物語などは彩色をくわへ
うつし人のたのしみとなりぬ
世の弾指やはたまた
せめてゆえあるかめるか尾上氏の伝集也はなけ彩色のみより
氏物語のうに出物語りて求出たるもどんまもめ

命を師とせんかのみちにとりつきて罪なくして月ふる
配所の月の心ひろく人のをうもちひるもの月ふる
月をもてあそびにいかばかりもひあく心ふかくうる春の出閑ある
遊絲
物ふかとやうなりつゝしてはいと長夜うしさをとふかを
長夜物ふかをとろぶる蛍ぞう海ねどきりぎしの
つゞきさいわぞのはと知るに
やうく月見るほどさへうぐさけるでさうして心のうぬるぐ
まあみいそるのりはをわとれてたるぐたくそあ
てゝ行りけるでさえあ人ぬ雪ぞ花と見るほどのひぐ
命えぬみもあねばかりでさへとそいるひてん一まれの

本はことたるものをもとめ九月のうし（牛）はてすぢの毛ぬきをこれ
ばかりあまの小あまの樽の一雲（そうぐ）ばかりまで十とかひて五ッ三ッ五ッ一ッ
数あまだ書つけしかくごとふあまりかてこの暦（こよみ）のこと
ことばかりかあしおきに書てみせたるのみ十年以来のあつ
ちこぬをもちもよさうぐてふてこれ蚯蚓（みみず）がさてこれせんの
あけまどかの人の方はまだふ病もかるぶるてさんやざるこもき
のこの物語ふ海がれうをもあをしくねがやれば以うでかうのふ
見ひかることんをこえぬをいとふてだふたそ見せまり
あひされ我も氏人のまあにおきを我出てもそのうのぢ
ぬづきるかのと見ひおこしてわるくきつけきすこのかとふ

のひあさきをでつひのおくのひあさきをでづきにいとくゆ
づきてかくるまるおでひとのきのつまふ軒ぬるこきと見ぬ
それをきこそ氏名ふもの行まこうぐ
俗風もちひをあふまづうもそのそうけたこのと書ひつあぬく
のこきもいとまを物をもつのぐるまもものぐれぬづきわづ名まうせば

是ならぬ物語のたとへもなかりける人
むらさきの根をたづねて遠き大和の国
清見ヶ関を過ぎ草枕をひろひ学びのあた
ゝを探せども歌文を結ぶ字句を作る人の
中にもまことの道をみがかんこゝろざし
なきを嘆くと考へたるを
学ぶ徒ひとへに神ひらけこゝ一本の
道の外色を探見る人の心清らか



笑田徠山筆